

2022年度 第2回 入学試験問題

国 語 (50分)

解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

一 次の文章——線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- 1 書類をソウフする。
- 2 本をカシ出す。
- 3 実力をハツキする。
- 4 事態をセイカンする。
- 5 絵画をキョウバイにかける。
- 6 エンマンに解決する。
- 7 キヒンあるふるまい。
- 8 人材のホウコ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

もう40年も前のことになりましたが、長野県に生息する野生ニホンザルにアーモンドの実を^{あた}与える実験を行った研究者がいました。山に暮らすサルで、アーモンドは日本列島には自生しないのですから、^{かれ}彼らがアーモンドの実にそれまで接したことがないのは明白。つまり^②ナイーヴな状態であるといえます。

^③ といつてもクリやシイの木の実にはなじみがありますし、好物ですから、見てそれが食べられそうな^{しろもの}代物であることぐらいは察しがつくというものです。試しに口に入れてみて、^①食べられることをすぐに理解したといえます。

サルに理解させたいので、研究者はアーモンドの実に^{さいとさい}催吐剤をふりかけ、彼らに与えてみたのでした。催吐剤とは、^{せつしゅ}摂取するとしばらくして^{おうと}嘔吐を引き起こす薬剤のことです。するとサルは口に入れてしばらくすると、やはり嘔吐したということです。もつともこれだけでは、^④ヒトに有効な催吐剤はサルにも効く、という話で済みません。問題は、そこからです。

追跡調査をしてみると、^④この嘔吐の経験以降、サルはアーモンドを与えても、もう一切口にしないことがわかったのです。ちなみに催吐剤を与えたのは、一度だけです。しかも、この経験から1年が経過しても、サルのアーモンド^{きよひ}拒否の反応は、全然変わることはありませんでした。サル学者は、こういう風に自分の身体に有害なことを動物がすみやかに覚える現象を、「^{けんお}嫌悪学習」という特別な名称で呼ぶことにしています。

嫌悪学習が、それまで知られてきた通常の学習と異なる点は、まずたった一度の経験でその学習が成立するという点にありま
す。ふつうは何回も経験して、ようやく学習するわけですが、一度きりでいいのです。

つぎに、一度きりの経験であるにもかかわらず、その効果が尋常でないほどに持続するという点です。長野のサルは一度ア
モンドで嘔吐すると、それから1年たつて再びアモンドを見ても、食べようとしませんでした。その間、アモンドを見る機会
がなかったのにもかかわらずです。1年前の嫌悪体験を記憶していたとしか考えられません。サルは身に害のあることについては、
ずっと覚えていられることができるのです。というか、忘れようとしても忘れられないと書くほうが正確でしょう。

学習という現象を世界で初めて実験的にデモンストレーションしたのは、今から100年あまりも前のこと。アメリカの心理学
者がネズミを用いて、やってみせたのでした。

迷路の箱を用意し、そこへ1匹の空腹にしたネズミを入れてやります。ネズミは **I** のなかをうろろ走り回ります。やがて
いつか、 **II** に到達するにいたります。実験者は、それまで気長に待っています。そして、出口から出てくると、少し餌を与え
ます。同時に **III** を抜け出すのに、どれだけの時間を要したかを記録しておきます。

すぐにまた、同じネズミを前回とまったく同じ要領で迷路箱に入れてやります。むろん、ネズミはうろろしたあげくに、やが
て出口に来る。すると餌を与える……。こういうことを何回も繰り返していると、ネズミが出口への到達に要する時間が短くなる
ことが明らかになりました。これこそが学習の証拠だと、研究者は主張したのでした。

A という事実を、ネズミは学習したのでした。

そして、餌をもらうために、できるだけ早く迷路を出ようと努力するようになっていったのでした。

ただし、学習が成立するためには、何度も何度も迷路に入れてやるが必要でした。つまりネズミは試行錯誤の末に、ようや
く迷路の課題の意味を学習するのです。さらにいったん学習しても、しばらく迷路に入れてやらないと、迷路から抜け出すために費
やす時間がすぐに長くなるという事実も判明したのでした。学習効果を保持するためには、訓練を続けていないとだめなのです。

⑤ こういう特徴はネズミに限りません。サルでも、またヒトでも同様のことがあてはまるのは、自分の経験を胸に手をあて回
想すると了解できるに違いありません。しかし嫌悪学習は、そうした通常の試行錯誤による学習と、まったく趣きを異にする
のです。

(正高信男『自粛するサル、しないサル』幻冬舎より)

問一 —— 線①「彼ら」が指し示す対象を具体的に述べている十五字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問二 — 線② 「ナイーブな状態である」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア、複雑なことが理解できず単純な考えのままであるということ。
- イ、心理的に傷つきやすい敏感な気分であるということ。
- ウ、生まれつき善い性質を持っているということ。
- エ、特別な思いこみを持たず素直な状態であるということ。
- オ、知識が少ないことからくる不安を抱えているということ。

問三 — 線③ 「察しがつく」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、詳しく説明できる
- イ、不安をおさえこめる
- ウ、親が子に教え伝える
- エ、事情を予測できる

問四 — 線④ 「この嘔吐の経験以降、サルはアーモンドを与えても、もう一切口にしない」とありますが、その理由を筆者はどのように述べていますか。次の文の空らん^①に当てはまる五字以上十字以内の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

サルがアーモンドを（ ）
（ ）ものであると学習したから。

問五 空らん^① I、II、IIIに入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|---|----|---|----|-----|----|---|----|---|----|
| ア、Ⅰ | 迷路 | Ⅱ | 出口 | Ⅲ | 迷路 | イ、Ⅰ | 出口 | Ⅱ | 出口 | Ⅲ | 迷路 |
| ウ、Ⅰ | 迷路 | Ⅱ | 迷路 | Ⅲ | 迷路 | エ、Ⅰ | 迷路 | Ⅱ | 出口 | Ⅲ | 出口 |

問六 空らん A に入るのにふさわしい内容を、十字以上二十字以内で答えなさい。ただし、「餌」という言葉を必ず用いること。

問七 ——線⑤ 「こういう特徴はネズミに限りません」とありますが、「ネズミ」における「特徴」を説明した次の文の空らん当てはまる言葉を答えなさい。

ネズミが迷路から早く出られる状態を保つには（

）ということ。

問八 ——線⑥ 「まったく趣きを異にするのです」とありますが、何と何がそれぞれどのような「趣き」をもっているのですか。違いがわかるように説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（句読点や記号も一字と数えます。）

夏休みの終わりに、千春は近所の図書館に行った。

子どもむけの本が置かれた一画は、けっこう混んでいた。宿題のためだろうか、小声で相談しながら本棚を物色している親子連れもいる。千春も一冊選び、近くに腰かけようとしたけれど、ソファも椅子も埋まってしまっていた。

座れる場所を探しているうちに、いつのまにか一般書のコーナーに足を踏み入っていた。上から下までおとなの本がずらりとならんだ棚は、見慣れている児童書のそれよりもずっと高く、ほとんど天井まで届きそうだ。蛍光灯の光がさえぎられて、通路は

ほの暗い。

そのつきあたりには、空いている椅子をひとつ見つけた。

歩き出しかけて、千春はびくりとして立ちどまった。数メートル先で棚を眺めている人影に、見覚えがあった。

① おじさんだった。千春には、気づいていない。

つかのま、ためらった。このまま、まわれ右をして立ち去ることもできる。でもこれは、突然お店に行かなくなった理由をおじさんに伝える、またとない機会だ。千春がおじさんに会いたくないわけでも、お店のことを忘れたわけでもなくて、お母さんのせいなのだと言明したい。

心を決めて、千春は足を踏み出した。お母さんとは、お店に行かない、と約束したのだ。おじさんと話をしない、じゃなくて。

「おじさん」

千春がささやきかけると、おじさんは手に持っていたぶあつい本を取り落としかけた。アルファベットのびっしりならんだページが、ちらりと見えた。

「おお、ひさしぶり」

A をまるくして、千春を見下ろす。

「どうした？ こわい顔して」

「話があるの」

「それは長い話？」

おじさんはひざを折って千春と視線を合わせ、ひそひそとたずねた。

「ちよつと長くなる、かも」

「じゃあ外のほうがいいな」

図書館のまわりをぐるりと囲んでいる遊歩道に、おじさんは千春を案内してくれた。

昼さがりの強い陽ざしが照りつける小道は、閑散としていた。せみがせつぱつぱつまった勢いで鳴いている。千春はいつも正面玄関からすぐに建物の中へ入ってしまうので、こんな道があるとは知らなかった。

遊歩道に沿ってぼつぼつとならんだベンチのうち、日陰になっているひとつに、ふたりで腰を下ろした。左右に植えられた桜の大木が、みっしりと葉をつけた枝をさしのべ、直射日光をさえぎってくれている。

③ 千春の話聞き終えたおじさんは、なるほどね、とうなって腕を組んだ。

「お母さんの気持ちもわかるな」

「わかるって？」

千春は聞き返した。てつきり、おじさんは千春の味方をしてくれるものだと思っていた。

「かわいい娘が、どこの誰ともわからん妙なおやじと仲よくしてると知ったら、そりゃ心配するよ。近頃は物騒な事件だつて多いし」

どこか他人ごとのように、おじさんは言う。一方的に誤解されているというのに、Bを立てるそぶりもない。

「で、きみはどうしたい？」

「わたし？」

思いがけず質問を返され、千春は言葉につまった。

「もちろん、お店に遊びにいきたいよ。今までどおりに」

「そうか。だったら、お母さんにもそう言えば？」

「言ったよ。でもお母さん、全然聞いてくれないんだもん」

いらだちがよみがえってきて、訴える。

「わたしは子どもだから、世の中のことがわかってないって。ひどくない？ おじさんのことだって、よく知らないのに疑ったりして」

「しよががないよ。お母さんにとっちゃ、赤の他人なんだから。知らないからこそ信用できないだろ。あとはショックもあるかもな。子どもに親の知らない世界があるってのは、さびしいもんだ」

聞いているうちに、千春はだんだん悲しくなってきた。おじさんにとって、千春はそれこそ「赤の他人」にすぎないのだろうか。お店に来て来なくても、どっちだっていいのかもしれない。千春と会えなくなっても、別にかまわないのかもしれない。

「もういい」

勢いをつけて、ベンチから立ちあがる。

「どうした？」

⑥「おじさんにとつては、どうでもいいことでしょ？」

声がみつともなくうわずった。

「どうでもよくないよ」

おじさんがうすく口を開けてまばたきをした。それから、ずっと表情をひきしめて、座ったまま千春に両手をさしのべた。

手をとられて、千春はおじさんを正面から見下ろした。

「悪かった。つい、親の気持ちになっちまった。おれも、きみに会えなくなるのはさびしいよ」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

おじさんはまじめな顔で何度もうなずいた。千春はベンチに座り直した。

「もう一度、お母さんとじっくり話したら？」

「どうせまた聞いてくれないよ」

「まあまあ、そうやって決めつけないで。きみだって、お母さんにいろいろ決めつけられて、いやだったんだろ？」

「そうだけど」

「たいていの人間は、決めつけられるのがきらいなんだよ……って、これも決めつけだな」

おじさんが首を振り、千春の目をのぞきこんだ。

「いいか。どうせわかってもらえない、って考えるのは、相手を信じてないからだ」

たしかに、そうかもしれない。

「そういう気持ちはな、口に出さなくたって伝わっちゃうんだよ。それで、話がますますこじれてく」

考え考え、おじさんは言葉を継いでいく。千春に言い聞かせながら、自ら頭の中を整理しているようでもあった。

「だけど、よく考えてみな。自分のことを信じてくれてない人間のことを、きみは信じられるか？」

「でも、お母さんのほうだって、わたしのことを信じてくれてないわけだよね？」

千春はお母さんを、お母さんは千春を、それぞれ信じきれていない。そういう意味では、おたがいさまなのだ。

「そういうときは、こっちから歩み寄ってやらなきゃ」

おじさんが千春の頭をわしやわしやとなでた。

「きみなら、できる」

できる、だろうか。千春がなんとも答えられずにいたら、おじさんはにやりと笑った。

「もういい！」

だしぬけに甲高い作り声をはりあげられ、千春はたじろいだ。

「……なんて言わずに、な」

おじさんはさっきの千春のまねをしたつもりらしい。こうして再現されてみると、すごく子どもっぽい。

「そうだ。手、出して」

おじさんが言った。ポケットを探り、千春の差し出した手のひらに、黄色いかたまりをぼんとのせる。「なあに、これ？」

小鳥のかたちをした、陶器の置きもののようだった。片手にすっぽりおさまるほどの大きさと、胸をまるくふくらませ、ぴんと尾を張っている。表面に、色あざやかな塗料で、つぶらな黒い目と赤いくちばしと金色の羽が描き入れられていた。

「笛だよ。南米の奥地で暮らしてる、少数民族の」

よく見たら、小鳥のくちばしと尾の先に、ひとつずつ小さな穴が開いている。

「クルピっていうんだ。現地言葉で、誰かを呼ぶ、って意味らしい。しっぽのところに、口をつけて吹く」

会いたいひとの顔を思い浮かべながらこのクルピを吹けば、相手に笛の音が届くのだという。

「地元通訳に教えてもらったんだ。話を聞いたときは、^⑧(x)信(y)疑だったけどな。そしたら、むこうもおれが信じてないってわかったみたいで、実際に吹いてみせてくれた」

すると、しばらく経ってから、何キロも離れた自宅にいた彼の奥さんが、おじさんたちのところまでやってきた。笛の音が聞こえたから、と言って。

「びっくりしたよ。どういうしくみなんだろうな。すごいすごいって感動したら、新しいのをゆずってくれた」

おじさんが指先でちよいと小鳥の頭をなでた。

「これ、きみにやるよ」

「いいの？ もらっちゃって」

「うん。おれに会いたいって言うてくれた、お礼に。ちょうど今さつき、文献を読んでとこだったんだよ。正真正銘、本物みたいだぞ」

「ありがとう」

そんな不思議な力を宿した笛は、いったいどういう音がするんだろう。千春はわくわくしてクルピを口に近づけた。

「おっと、だめだめ」

おじさんが千春の腕をひっぱった。

「クルピは一回しか鳴らせないんだ」

「ええっ」

千春はあわてて手を下ろした。たった一度きりしか使えないなんて、いよいよ貴重なものだ。

「おじさん、ほんとにいいの？ 会いたいひと、いない？」

おじさんはほんの一瞬^{いっしゆん}だけ、宙に視線をさまよわせた。

「いや、いない」

あごひげをひとなでして、答える。

「でも、きみはまだ若い。どうしても会いたい相手に会えないってことが、将来あるかもしれない。いや、たぶんある」

おじさんが千春の手のひらに自分の手をそえて、そっとクルピを包みこんだ。

「さてと。じゃあ、早く帰ってお母さんと話しな」

ベンチから立ち上がり、腰をかがめて千春と目を合わせる。

「信じろ。わかってもらえるはずだって。その気持ちは、きつと届く」

千春はこくりとうなずいた。おじさんがこぶし^{こぶし}を握り、親指^{おやぢ}をぐつと立てた。

「オオカミの口の中へ！」

(たきわあさこ
瀧羽麻子『たまねぎとはちみつ』偕成社より)

問一 —— 線① 「つかのま、ためらった」とありますが、それはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、おじさんのお店に行かないと自分から言い出してしまったから。

イ、おじさんとはもう二度と会いたくないと思っていたから。

ウ、おじさんのお店には行かないことをお母さんと約束していたから。

エ、おじさんは千春のことを気にかけていないと思っているから。

問二 —— 線② 「手に持っていたぶあつい本」とありますが、何について説明している本だと考えられますか。三字で文章の中から探し、抜き出して答えなさい。

問三 空らん A、B に入る最もふさわしい言葉をそれぞれ次のア～キの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、頭 イ、目 ウ、耳 エ、鼻 オ、口 カ、腹 キ、足

問四 〜〜線 a 「せっばつまった」、b 「たじろいだ」の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a 「せっばつまった」

ア、どうしようもないほどの

イ、楽しそうな

ウ、あきらめたような

エ、やる気がないような

b 「たじろいだ」

ア、悲しくなった

イ、しりごみした

ウ、あつげにとられた

エ、我に返った

問五 〜〜線③ 「お母さんの気持ちもわかるな」とありますが、「おじさん」は「お母さんの気持ち」をどんなものだと理解しましたか。二つに分けて読み取り、それぞれ一文にまとめて説明しなさい。

問六 〜〜線④ 「お母さん、全然聞いてくれないんだもん」とありますが、「お母さん」に話を聞いてもらうために「千春」がどうするべきであると「おじさん」はアドバイスをしますか。「千春が（ ）こと」という形にまとめて答えなさい。

問七 〜〜線⑤ 「もういい」とありますが、「千春」はこの言葉を後になってどういう言葉だったと感じますか。次の文の空らんには当てはまる言葉を十字以内で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

() 言葉。

問八 — 線⑥ 『おじさんにとって、どうでもいいことでしょうか？』声がみつともなくうわずった」とありますが、このときの「千春」の気持ちを説明したものととして最もふさわしいものを次のア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、おじさんも千春の話をまったく聞こうとしてくれないことにいらだっている。

イ、千春にとっておじさんは結局他人だったということがわかりさびしく思っている。

ウ、おじさんが妙な人だと一方的に誤解されていることにおこっている。

エ、おじさんは千春に関心がないのかもしれないと思いきょクを受けている。

問九 — 線⑦ 「お母さんにいろいろ決めつけられて」とありますが、「千春」が「お母さん」から決めつけられたことを一つ、解答らんに合うように二十字で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

千春は（ ）とお母さんに決めつけられた。

問十 — 線⑧ 「（x）信（y）疑」とありますが、（x）、（y）には同じ漢字が入ります。当てはまる漢字一字を答えなさい。

問十一 — 線⑨ 「不思議な力」とはどのような力ですか。それについて書かれている一文を文章中から探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問十二 — 線⑩ 「オオカミの口の中へ」とありますが、「おじさん」はどのような思いでこの言葉を口にしたと考えられますか。答えとして最もふさわしいものを次のア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、お母さんをおこらせるとこわいからやめておけと千春に伝えたい。

イ、難しいことに勇敢に挑戦しようとしている千春を応援したい。

ウ、最後まで正しいことをやりぬいた千春をよくやったとほめたい。

エ、千春にこれから行うことはとても危険なことだとわからせたい。

